

複式授業のシンポジウムと複式学級指導法の教科書の紹介

八田明夫

Introduction of Symposium for Combined Class and the Textbook for Study of Combined Class

Akio Hatta

1 初めに

三大学連携事業では、幾つかの成果が上がっているが、その中から複式学級指導に関するシンポジウムと複式学級指導法の教科書について紹介する。

複式学級指導に関するシンポジウムは、平成20年11月29日に奄美市文化センターで実施されたもので、開催要項によると次のように主旨を紹介している。長崎・鹿児島・琉球の3大学教育学部は、平成17年度からの2年間、「新しい時代の要請に応える離島教育の革新」、平成19年度からは、「3大学の連携による離島・僻地校での教科指導力向上のための教育課程の編成—大学教員と小・中学校教員の相互訪問授業を軸として—」をテーマに掲げ、「子どもの成長発達への支援・複式授業・遠隔地教育・平和教育」などの内容について、共同研究を重ねてきました。本研究も最終年度を迎え、総括事業の一環として、このたび「複式授業」を主テーマに据えたシンポジウムを奄美市において開催する運びとなりました。本シンポジウムでは、学校現場との交流を通して積み上げてきた当方の研究成果を発表し、教育行政、学校現場からの課題提起をいただきます。さらに、研究成果を基に、学校現場からの要望に応える形でワークショップを準備いたしました。各方面から多数のご参加をいただき、充実した内容のものとなるよう努力いたします。

複式学級指導法の教科書は、複式学級研究の幹事校である鹿児島大学が中心となってまとめた、教員養成に活用できる教科書である。4年間の三大学の連携研究を基に完成できたものである。以下順に紹介する。

2 複式授業の指導法改善に役立つシンポジウム 複式授業の明日をともに考える

(1) 挨拶 鹿児島大学教育学部長 河原尚武

このたび本学部では、関係各方面のご協力を得て、シンポジウム「複式授業の明日をともに考える」及び教科ワークショップを、奄美の地で開催することになりました。

今回の企画は、年来取り組んでまいりました長崎大学及び琉球大学各教育学部との連携事業「離島・へき地校での教科指導力向上のための教育課程の編成—大学教

員と小・中学校教員の相互授業訪問を軸として一」(平成19～20年度文部科学省特別教育研究経費事業)の中間報告を兼ね、離島教育の振興を目標に、複式授業のあり方に焦点を置きつつ、実践や研究成果の交流を試みようとするものです。

鹿児島県教育委員会及び奄美市教育委員会のご後援に加えて、奄美大島各地の有志の方々の温かいご協力のもと、開催準備を進めることができましたことは、私どもにとりまして望外の喜びとするところであり、茲に深く感謝申し上げます。

当学部としましては、今後とも離島・へき地教育に係る研究課題に取り組み、各学校や先生方との協力協働を深めて、地域への貢献を積極的に進めてまいります。本日を機会に、どうか私どもの事業に関心をお寄せいただき、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(2) シンポジウム

1) 「三大学連携事業の成果」鹿児島大学 八田明夫

鹿児島・長崎・琉球の三大学の教育学部は、平成17,18年度に「新しい時代の要請に応える離島教育の革新」の課題で連携研究を行った。研究テーマを細分し、子ども理解・平和教育を長崎大、複式学級を鹿児島大、e-Learning 遠隔教育を琉球大、というように幹事大学を分担して、各テーマに三大学の教員が参加して共同研究を行った。

研究を通して、離島・へき地の教育についての理解や複式学級指導法の理解などを高めるために、各学部が改善すべきこと、取り組むべきことが明らかになった。

複式学級の指導は、大学教育で様々な分野の学習をしていれば、できるようになるという「予定調和」論で済むほど簡単なことでなく、複式学級指導に関して直接学んでいなければ、教育現場に入ってから苦勞する。教師がその苦勞をしている間は、児童にとって好ましいことではない。

研究成果として三大学は「複式学級指導法」の授業を構成し開講することを決めた。また、学年の異なる児童・生徒を指導する複式学級の指導方法は、単式学級の習熟度の違う児童・生徒の指導に役立つという学校現場からの報告も明らかになった。

19,20年度もテーマを発展させて、「三大学の連携による離島・僻地校での教科指導力向上のための教育課程の編成—大学教員と小・中学校教員の相互訪問授業を軸として—」で継続した。この取り組みも離島や山間僻地にある学校の教育が研究され、大学教員も参加した校内授業研修会を通して、現職教員の実践力向上に役立った。また、大学の「複式学級指導法」などの講義では、小・中学校の教員が「ゲ

ストティーチャー」として学生に直接、教育現場での実践の話をする機会も設けた。「複式学級指導法」の講義を受講した学生は、一様に「学生時代にこのような講義を受けることができて本当に良かった、複式学級のある小規模校に行くことが楽しみになった」という感想を提出している。このたび、このような成果を学校関係者に公開し、参加者とともに複式授業について考えるシンポジウムを企画した。関係の多くの方々のご参加をお待ちしています。

2)「複式授業の明日をともに考える」県教育庁義務教育課 指導主事 濱田耕一
南北600キロに渡る本県は、全学校数の過半数がへき地・小規模校であり、また、その多くが離島にあります。学校教育を取り巻く環境が地域ごとに異なる中、教育活動においても独自の工夫を求められることが多く、各小・中学校においては、少人数によるきめ細やかな指導を生かし、教育課題を特色に変えながら、児童生徒の「生きる力」を育てていただいているところです。

このような状況を踏まえ、県教育委員会ではへき地・小規模校教育を本県教育の重点として位置付け、へき地・小規模校への学校訪問を通して、その教育環境や課題の実態把握に努めています。また、研究校の指定や事業や施策の実施においては、へき地・小規模校を含めて推進するとともに、へき地・小規模校教育優秀校の表彰やリーフレット「南北600キロの教育～へき地・複式教育の手引きから」の配布により、研究実践の成果が本県のより多くの学校、地域に波及するようにしています。

3)鹿児島県総合教育センター研修係の立場から「複式授業の明日をともに考える」

県総合教育センター 教科教育研修課義務教育研修係 研究主事 松山隆志

当教育センターが開設している土曜講座の中の「初めての複式学級担任講座」(4月下旬から年3回実施)には、週休日にもかかわらず、遠方からも多くの先生方が受講されます。その先生方のお話やアンケートに記された感想からは「今、目の前にいる子どもたちのために学習指導を充実させたい。」という強い思いが伝わってきます。

こうした思いに少しでも応えられるように、当教育センターでは土曜講座「初めての複式学級担任講座」の外にも、県内の離島3会場を含む6会場での移動講座「小学校複式学習指導講座」を実施しています。また、平成15年度から奄美市立宇宿小学校を研究提携校として委嘱し、これまで「算数科」及び「国語科」の複式学習

指導の在り方について、その研究成果を発表していただきました。本年度からは、研究教科を「理科」として研究を進めていただいているところです。さらに、当教育センターのWebページでは、複式学習指導の進め方についての「諸資料」、「指導資料」、「指導案例」などを提供しています。

へき地・小規模校教育の充実と振興は本県教育を推進する上での重点の一つであり、へき地・小規模校を研究支援することは当教育センターの大きな使命です。今後も、その研究支援が一層充実したものとなるよう努めたいと思います。

4)「複式学習指導のポイントと単式学級への生かし方」奄美市立宇宿小学校（鹿児島県総合教育センター提携校）二宮 進一 教諭，福元 尚美教諭

4-1 複式学習指導のポイント

複式学習指導のポイントは、指導内容の重点化にある。指導内容の重点化とは、指導内容を分析し、指導の立場を明らかにすること。指導内容の分析は、全単元の目標をとらえ、指導内容を明らかにすること。指導の立場を明らかにすることは、教師がすることと子どもにさせることを明らかにすること。以下のような手順で重点化を図る。

【指導内容の重点化の手順】

- ① 学習指導要領の目標、内容の分析
- ② 指導の立場を明確化（教師がすること、子どもにさせること）
- ③ 指導内容に応じて、指導の傾斜や「ずらし」「わたり」の位置付け

重点化を図る指導力を身に付けることが教師の力量を上げ、効率的な学習指導ができるようになる。そして、主体的な学びができる子どもの育成につながる。

4-2 複式学習指導の単式学級への生かし方

本校は、教育センター提携校という特性や次年度からの複式指導をスムーズに行う意味から単式学級における学習指導の中に、複式指導法を活用している。単式指導の中に指導内容の重点化の考えを生かしたり、間接指導の手立てを生かしたりしている。特に、上記の①②を生かし、ガイドを立てた学習指導も行っている。子どもたちは、自ら進行を行う喜びを知り、以前よりも意欲的に学習に臨んでいる。そのことが、子どもたちの思考力や表現力を高めることにつながる。

(3) ワークショップ

1) 算数分科会

複式学級シンポジウム 算数科複式授業の改善の試み

TV会議システムを利用した、複数の複式学級による算数科の集合学習

植村哲郎（鹿児島大学教育学部），吉元宣博（鹿児島市立山下小学校）

算数は、系統性が強く異学年同士での同単元学習が設定しにくく、異学年同士の教え合い、特に、下級生が上級生へ指導することは難しい。そのため、算数科の複式授業の形式は、ほとんどの場合学年別指導の形式がとられる。

このような難点をカバーする1つの方法として、遠隔協同学習が考えられる。遠隔地にある複数の学校の学級間を、TV会議システムを使って交信することによって複数の学校の同学年の児童が同じ内容を同時に学習することができる。お互いに移動することなしに集合学習の形態をとることができる。同一学年で構成される集団を大きくすることになるため、多くのアイデアが出やすく、練り上げによる学習効果も上がりやすくなる。

これまでに行った4回の検証授業の実際の報告と、授業後に行った児童と参観者へのアンケート結果を見ながら、この種の授業の可能性や改善効果について検証する。

2) 国語分科会

国語科授業が変わる！「コンピューター活用」と「新パターン」

奄美市立緑が丘小学校 福元真太郎・龍郷町立大勝小学校 亀崎智明

国語の授業の話し合いが「なにか深まらない」「なにか物足りない」と感じている方もいるのでは。今回ご紹介するのは、大型教科書を映し出し、書き込み自由な電子ボード。この電子ボードとパソコンで根拠を明確にした国語の授業ができること間違いなし。前半は、これからの時代に求められるコンピューターを活用した国語科授業を提案します。（緑が丘小・福元）

「算数の学年別指導はなんとか流れるんだけど、どうも国語は」というのも悩みの種。それは、算数の学習過程がほぼ一定していて、子どもたちもその流れに沿って、学習を進めていけるのに対し、国語はそうはいかないからです。そこで、後半は、算数を基に子どもたちだけでもある程度進められる国語科の新たな学習過程を提案します。（大勝小・亀崎）

前半と後半に分かれての発表ですが、どちらも複式学級のみならず、単式学級の指導に生かせるヒント満載です。どうぞご期待ください。

3) 理科分科会

学年別指導の理科複式授業

八田明夫・三仲啓(鹿児島大学), 吉田安規良(琉球大学), 橋本健夫(長崎大学)
複式学級の授業方法の基本は、学年別指導である。児童の発達段階を考えたり、児童の転校などを考えたりすれば、必然的に学年別の指導となる。音楽など指導要領が元々2学年ごとの指導内容で構成されている教科と違って、理科などは学年別の指導が基本である。

ところが、国語、算数は学年別指導が基本的に行われているが、理科、社会は、A・B年度方式という2学年同時指導の形態が目立つ。

理科で学年別指導を行わない理由として、野外での実験観察があるので学年別指導が困難であるとか、理科は目を離せない実験があるので学年別は困難であるとかいう理由があげられ、学年別指導を実施しない場合が目立つ。

こうした学年別の授業が行われていない実態に対して、学校で工夫して学年別の理科複式授業が実践されてもいる。学校で工夫されている方法を紹介し、学校内の協力体制や実験観察の組み合わせの工夫を通して学年別の指導を可能にするための条件を求めて本報告をする。

4) 体育分科会

離島校・僻地校における球技の指導法と運動意欲及びライフスキルの測定法

藤田勉(鹿児島大学教育学部保健体育科)・小林稔(琉球大学教育学部教育実践センター)・具志堅太一(琉球大学大学院教育学研究科)

体育分科会のワークショップは、1) 少人数で行うバスケットボールの練習方法、2) 運動意欲の測定法、3) ライフスキルの測定法という3部構成で行います。藤田は、バスケットボール及びそれに関連したボール運動を少人数で行っていく場合のメニューをいくつか紹介します。小林は、MIPE (Motivation Inventory for Physical Education, 猪俣・猪俣, 1986) という心理検査を使って児童生徒の運動意欲についての理解の深め方を説明します。また、参加者の皆さんにも実際にMIPEを体験してもらおうと思います。そして、具志堅は、学習指導要領において重要視されている「生きる力」を質問紙で測定するべく開発した小学生用の多次元のライフスキル尺度の説明をします。

5) 音楽分科会

離島僻地の音楽教育と歌唱・合唱指導法

齊藤 祐（鹿児島大学教育学部）

日吉 武（鹿児島大学教育学部）

教育現場で欠かすことのできない表現活動の一つが歌唱・合唱活動です。普段の音楽授業だけでなく学級活動や学校行事等、多くの場面で行われます。しかしそれだけに発声の指導から楽曲の練習に至るまで、先生方の悩みも多いようです。特に離島・僻地の音楽教育では、異なる学年の子どもたちが一緒に活動する場面が多いだけに抱えている課題も多様に思われます。本分科会では、声楽と音楽教育を担当している二人が、離島・僻地の音楽教育について視察・調査した内容を踏まえ、歌唱・合唱指導を中心に先生方の悩みや疑問にお応えします。歌唱発声の原理について学んでいただくとともに、楽曲での実践についても体験していただきます。また学年の差を越えて踏まえておくべき指導のポイントは何なのか、子どもたちが意欲をもって取り組める指導方法とはどのようなものか等について、実際に活動に取り組みながら参加者の皆様とともに考えていきたいと思えます。

(4) ポスター発表

1) 複式学級児童のテレビ会議システムによる遠隔共同学習

琉球大学 仲間正浩, 米盛徳市

鹿児島大学 園屋高志, 関山徹, 植村哲郎

長崎大学 藤木卓, 寺嶋浩介, 織田芳人, 藤本登, 森田裕介 (現早稲田大学)

琉球大, 鹿児島大, 長崎大三大学 ICT 活用研究グループは平成 17~20 年度の活動において, テレビ会議システムを用いた三県離島校間の遠隔共同学習の企画・実施を行ってきた。参加校は奄美大島の名音小学校 (大和村), 長崎県対馬の久原小学校, 沖縄県小浜島の小浜小学校と西表島の白浜小学校である。遠隔共同学習で複式学級の子どもたちは, 多くの同級生と知り合うことができ, 活発な発表や意見交換を行った。その結果 (1) プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力をお互いに高め合うことができ, また遠隔地の相手との情報交換により, (2) 相手の学校や地域, 文化などを知る, (3) 相手に伝えるために自分の学校や地域のことを改めて知る, (4) 地域によって生活や文化に違いがあることを実感する等の成果を得た。さらに, (5) 情報の収集から発表までの一連の過程を通すことによって情報活用能力を習得することもできた。

2) 複式指導に生かせる個に応じた指導の充実

霧島市立国分北小学校 中島保男

今年 3 月に改訂した新学習指導要領では, 「生きる力」をより一層育むことを重視し, 基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成を目指している。また, 移行期間である平成 21 年度から算数, 理科を中心に内容の一部を先行して実施し, 確かな学力の定着を図るようにしている。

確かな学力を育むためには, 個に応じた指導の充実が不可欠である。小規模校における複式指導や小規模校以外の多くの学校で実施されている習熟の程度に応じた指導・少人数指導は, 個に応じたきめ細かな指導が実施できることから, 基礎・基本の確実な定着を図り, 確かな学力を身に付けることができる指導法の一つであると考えられる。

そこで, 算数科における少人数指導の個に応じた指導の工夫の中から, 複式の間接指導の充実に生かすことができるとされる ICT を活用した授業づくり, 指導形態の工夫, 学習環境づくりなどの取組を紹介する。

3 複式学級指導法の教科書

(1) 目次

表1に長崎・鹿児島・琉球 3大学連携研究「複式学級指導法」編集委員会 編「複式学級指導法」—単式学級内の学力差に対応した現場の工夫にも役立つ指導法—の目次を示す。

表1 「複式学級指導法」の目次

1章 複式学級をめぐる全国的な状況
1. 全国的な児童数の減少と複式学級編制
2. 単式学級が必要としている習熟度別授業
3. 地域に小学校を残す意義
2章 複式学級指導法
1. 複式学級担当者の切望
2. 複式学級指導法の原理
3. 複式学級指導法の留意点
4. 複式授業から学ぶもの
5. 教師の研鑽，複式学級研修会の意義
6. 極少人数学級・変則複式の指導のあり方
7. 複式学級の経験の蓄積
3章 国語の複式授業
1. 複式学級における国語指導について
2. 1・2年の複式授業
3. 3・4年の複式授業
4. 5・6年の複式授業
5. 変則的な複式学級で行われている授業実践
4章 算数科の複式授業
1. 複式学級における算数科複式授業の実態と課題
2. 算数科の授業づくり
3. 算数科複式授業改善の工夫
4. 指導例
5. 算数科複式授業におけるコンピュータ利用例
5章 社会科の複式授業
1. 社会科における複式指導の現状

2. 3・4年の複式授業

3. 5・6年の複式授業

第6章 理科の複式授業

1. 複式学級における理科授業の実際

2. 複式学級での理科のカリキュラム

3. 複式学級での理科の授業実践案 (3・4年理科)

4. 複式学級での理科授業実践案 (5・6年理科)

5. 変則的な学級編成の複式学級の場合

6. 学年別複式指導に参考になる資料

7章 離島・へき地複式学級における図画工作科の指導

1. はじめに

2. 自然環境と美術教育

3. 図画工作科の授業における複式学習

4. 離島・へき地における実践事例

5. おわりに

8章 複式学級や少人数学級における音楽教育

1. 離島・へき地の音楽教育の現状と指導法

2. 子どもたちの意欲を高める歌唱指導

3. 「合唱発声指導法」—発声原理と指導の言葉かけ—

9章 体育の複式授業

1. 小学校低学年の「ゲーム領域」

2. 小学校高学年の「器械運動」

3. 中学校の「球技 (バスケットボール)」

10章 小規模校同士の学びの場

1. 複式学級におけるテレビ会議システムを利用した遠隔共同学習

2. 学校図書館の機能を活用した学び

(2) 序文 八田 明夫

この序文では、4年間の研究で、学校現場で多くの先生方に接し、また授業中の児童の観察から、導き出された結論を述べている。筆者は平成9年から附属学校以外の複式授業をほぼ毎年参観する機会を得てきた。その中でおぼろげながら持つよ

うになった複式学級にたいする見方が、研究を通して確証に至るようになった。ではその結論を紹介しよう。

複式学級指導に対していくつかの誤解があるようである。

2つの学年の児童・生徒を1人の先生が指導するので、授業の半分は「自習」という誤解。先生が1人なので、2分の1しか指導して貰っていない、という誤解である。また、教員であれば、複式学級の指導はすぐにできるようになる、という誤解。普通の授業と同じように、2つの学年を交互に授業すれば良いと思って授業すると、指導を疎かにしてしまう。これは教師による誤解である。

「自習だ」「2分の1だ」という誤解は、主に保護者から聞かれる。これは、複式学級で保護者による授業参観が行われた時の話。授業者は十分な準備をして文句の付け所のない複式授業をしているのに、授業後の話し合いで保護者から「先生方が苦勞されて一生懸命授業をしているのは良く分かる。でも、所詮、2分の1。県に先生を増やすように言ってくれ」という「要望」が出たという。一生懸命授業準備をしてきた先生が、がっかりされたのは目に見えるようである。

複式学級で担任が一方の学年の直接指導をしている時、もう一方の学年は自習をしているのではない。先生の指導のもとで「主体的な学習」をしているのである。児童・生徒が理解するとき主体的な学習が重要な役割を果たしていることは言うまでもない。学習における基本である「主体的な学習」が複式学級では必然として行われるのである。

過疎化が進む日本では、地域から学校が消えると復元不能な集落の衰退が始まる。学校が残されていれば、次の世代が戻ることができる。児童の数が減少した時、2つの学校を統合し先生の数を半分にすることが多い。しかし、統合しなくとも複式学級にしても先生は半分で良い。「校長・教頭の配置は？」ということまで節約したければ、2つの学校を兼務し、校長と教頭がそれぞれの学校に1人ずつ分かれて勤務すれば良い。せめて小学生のうち足腰を鍛えながら歩いて通える範囲に学校を残してあげたい。

近年、「新しく複式学級となるので、その指導法を身につけたい」という要望が増えている。全校の児童数が60名以下になった学校は、その予備軍である。

本書は、複式学級の担当者が直面する技術的な困難に対して、解決策を示している。実践を通して実証された解決策を紹介している。

複式学級研究指定校の報告に「複式学級で培った指導法は、単式学級においても到達段階の違う児童の指導にきっと役立つ！」と書かれている。

新しく複式学級を担当する先生だけでなく、単式学級の担当者にも本書を通して、主体的な学習や理解の速さに違いがある児童の指導に役立てて貰いたい。

2009年3月31日

以上，シンポジウムと教科書の二つの成果を紹介した。複式学級指導法の教科書は，単式学級の習熟度別の指導にも役立つもので，広く活用されることが期待される。

引用文献

鹿児島大学教育学部(2008)：シンポジウム「複式授業の明日をともに考える」(リーフレット)

長崎・鹿児島・琉球 3大学連携研究「複式学級指導法」編集委員会編(2009)：「複式学級指導法」—単式学級内の学力差に対応した現場の工夫にも役立つ指導法—